



# 文学部生になったら - 在学生・卒業生に聞く -

**萩原 佑悟**  
(Hagihara Yugo 2年生)  
大阪教育大学附属高校天王寺校舎卒業



**松尾 弥悠**  
(MATSUO Miyu 1年生)  
立命館高等学校卒業

1週間の時間割

	月	火	水	木	金
1	科学史 A	数学 B	西洋史演習	東洋史	
2	神戸大学史 A	阪神淡路大震災 A	ものづくりと科学技術 A	西洋史	社会学概論
3	東洋史	西洋美術史		ロシア語	西洋史演習
4	英語	西洋史演習			
5					

2年生の前期では基本的に教養科目はまだ残っています。ただ言語の授業数が1年に比べて減るので、その分文学部での専門科目の授業が増えました。僕は西洋史専修なので専門科目は歴史系の授業がメインになっています。教養科目は必要な分として、それと言語以外のコマに専門科目を入れている感じです。

## ある1日の過ごし方

- 7:30 起床。授業が1限からある日の朝は早い。高校生活の名残があった1年の序盤の頃は寒くて、段々しんどくなってきました。非下宿勢の朝はもっと早いみたいです。
- 8:50 1限 東洋史。この授業では主にイスラム文化の歴史を学んでいます。予習で授業で扱う洋書を自分で訳して要点を絞り、授業中に先生と一緒に内容を詳しくとっていき流れます。
- 10:40 2限 西洋史。こちらは講義形式です。主に古典期アテナイの裁判について学びます。この授業は他学部から来ている生徒も多いようです。
- 12:10 昼休み。教養や言語の授業が行われる校舎と文学部校舎は少し離れている(徒歩10分)ので、この間に昼食と移動を済ませます。
- 13:20 3限 ロシア語。2年の前期までは英語含め言語の授業は残っています。内容的には1年に続くくらいのレベルです。
- 14:50 放課後。学校に残ったり家に帰って翌日の予習をします。下宿なので、買い物や家事に時間をとられることもあります。残りは気ままなフリースタイルです。
- 2:00 就寝。翌日は2限スタートで余裕があるので夜更かしがちです。そしてだいたい翌朝後悔します。

神大文学部の1学年の定員は100人程度と小規模なので、その中でいくつかの仲良しグループが別個に形成されたとしても、メンバーの中には他のグループにも友達がいり知人がいたりすることが多いです。それが連なって全体がうすうす繋がっているのが文学部の人間関係の特徴だと思います。なので交友関係の範囲が限定され過ぎないのがこの学部の良いところの1つだと思います。あと個人的には文学部校舎が標高の低い所にあることを推してよかったです。六甲台キャンパスへの登下校はど頑張っても登山になってしまうので、少しでも山の麓にあるのはありがたいです。

勉強面で特徴的なのはやはり専修という制度です。1年まではなんだかんだで浅く広い学習を求められましたが、2年からは専修に所属して専門的な学習が始まります。僕は入学する前から志望専修は決めていましたが、1年の間に各専修の入門的な授業を受けて、その上で決めた人も多いようです。神大文学部にも結構たくさん専修があって、文系の人ならどれか1つくらいは興味のある分野の専修もあると思います。なので、勉強したい分野が決まっている人はもちろんそれを突き詰められるし、そこまで定まっていなかった人でも探せば見つけられるような環境が整っているのが文学部の良いところだと思います。

1週間の時間割

	月	火	水	木	金
1			English Communication		初年次セミナー
2	English Literacy		健康・スポーツ科学実習		知識システム入門
3	哲学入門	社会文化入門	情報基礎	史学入門	
4	文学入門	中国語初級		中国語初級	
5					

1年生には、文学部での学びがどのようなものかという授業が多く開講されています。大学生になると、自分で授業を組むのも高校生に比べて自由度が高く、自分で考えて行動する機会が増えるので大変ではありますが楽しいです。

## ある1日の過ごし方

- 8:00 2限からの日はゆっくり起床。朝食後、掃除や課題をしたりして時間を潰します。
- 10:00 徒歩で学校へ向かいます。
- 10:40 2限は必修の英語の授業。長文を読んだりライティングをしたりします。課題が多めなのでちょっと大変。
- 12:10 友達と一緒に昼食を取ります。授業が終わってすぐに食堂で食事を済ませて少し時間をずらして利用したり、天気があればお弁当を買って外で食べることもあります。
- 13:20 3限の哲学入門。哲学とは何かということや、様々な時代の哲学者について学びます。
- 15:10 4限の文学入門。オムニバス形式の授業で様々な国の文学作品を読みます。下校。スーパーに寄って買い物をしてから帰ります。
- 16:40 帰宅して夕食を作ります。夕食後は課題をしたり動画を見てまったり過ごします。
- 23:00 就寝。

文学部と一口に言っても中には様々な分野が含まれています。神戸大学文学部では、1年生のために各専修について知る授業が開講されており、自分が今まであまり知らなかった分野に触れることが出来ます。私も実際授業を受けて、この学部を受験しようと思ったときには考えてもみなかった分野に興味がありました。入学してすぐに専修を決める必要が無く、自分の興味の幅を広げて悩める時間がたっぷりあるというのは、神戸大学文学部の大きなメリットの1つだと思います。また、文学部は留学支援なども充実しています。期間や行き先の種類も豊富で、自分の目的に合わせて計画を立てられます。1年生でも参加できる海外研修もありますし、海外からの留学生もたくさんいて外国の方と関わる機会が一気に増えるので、留学に興味のある学生にとって最高の環境です。文学部は他の学部と比べて人数が少ないのですが、その分一人一人に対するサポートが手厚く、学生の相談にも丁寧に対応してくれます。同級生や先輩も優しく、アットホームな雰囲気がこの学部の魅力です。

大学は授業でもそれ以外でもそれまでにしたことがない体験をすることができ、たくさんの刺激を貰えます。高校までの常識が簡単に覆ることもあります。やりたいことが決まっている人は新しい環境で視野を広げることができず、やりたいことを探したいという人にとっても神戸大学文学部はぴったりの場所です。

## 学部時代の思い出



**大野 裕紀子** (OHNO Yukiko 2017年3月卒業 トヨタ自動車株式会社勤務)

神戸大学文学部での学びの流れを簡単に説明すると、1年生の間は語学と、教養原論と呼ばれる全学部共通の一般教養、加えて文学部の専門科目の入門の授業を受講します。そして1年生の内から文学部の多様な専門を入門的に学ぶ中で、2年生以降に自分がどの専修に進みたいかを考えます。そして、2年生の後期から卒業するまでの2年半は、各専修にて自分の専門を詳しく学び、4年生での卒業論文執筆に向けて勉強を進めていきます。

そして在学中に、自分の専門だけでなく、純文学から社会科学まで多岐にわたる分野に触れられたのが非常に有益であり、また同じ学部内で全く毛色の異なる学問を学べるのが、文学部の素敵な所だと私は思います。例えば、心理学専修に進んで以降も受講し続けた美術史の授業で学んだ知識が、ヨーロッパ旅行での絵画鑑賞を非常に実りあるものにし、入門の授業で取り扱った英米文学の書籍が、企業で働いた後に出会った多国籍の人との共通の話題になったりと、

自分の人生や、世界中の人々とのコミュニケーションを数段豊かにする「教養」をしっかり学べた点が、今の私の財産になっています。

そして自分の専門の心理学について、私は卒業論文執筆に当たって文化心理学を選び、人の心や行動の背景となる文化差について真剣に考えました。経済学や経営学を学ぶ学生が多い中で、「人の心」に焦点を当て学んだ事が、4年生での就職活動にも大変プラスに作用したと思います。心理学専修では、授業でも先生方が社会心理学、認知心理学の様々な実験にお声かけ下さり、海外の先生との共同作業や学会でのポスター発表を始め、積極的に学べる環境がありました。また卒業研究では体系的な要素もあり、自身で実験を計画し仮説を立て検証していくという作業を実際に行い、その中で試行錯誤した経験が今後社会人として仕事をする中でも生きていくと私は思います。

## 入学から卒業まで

- ① **専修の決定** — 「よく考えて自分の専門を決めることができる」  
文学部には、哲学、文学、史学、知識システム、社会文化という5講座に15の専修があります。1年次の11月末頃に専修を決め、2年生からそれぞれの専修に所属することになります。自分は文学部でなにを研究したいのか、じっくり考えてから選ぶことができます。そのために、各講座ごとのガイダンスとも言える「入門」、人文学への導入をはかる「人文学導入演習」、そして各専修での研究の基礎を身につける「人文学基礎」など、学生の興味・関心に応じて選択できるような、いくつかの内容に分けて1年生向けの授業が複数開講されています。これらを参考に、自分が進む専門を決定します。
- ② **文学部の授業科目** — 「四年一貫で学ぶ人文学の多様な広がり」  
文学部の学生が4年間に学ぶ授業科目は、全学共通授業科目と文学部の専門科目に分けることができます。全学共通授業科目は、教養科目、外国語科目、健康・スポーツ科学などで構成されています。文学部の専門科目は、基礎科目、自由選択科目、卒業論文関連科目、卒業論文からなります。下の図に履修に関する学年ごとの大きな流れを示します。

1年	2年	3年	4年
基礎教養科目 総合教養科目	基礎教養科目 総合教養科目	高度教養科目	高度教養科目
外国語科目	外国語科目	専門科目	専門科目
健康・スポーツ科学			
専門科目 (基礎科目)	専門科目		卒業論文

- ③ **講義と演習** — 「徹底した少人数教育と課題探究能力の開発」  
文学部で高い割合を占める授業科目が、特定のテーマを探究する「特殊講義」と、数人から十数人で行う「演習」、いわゆるゼミです。実験やフィールドワークを含む「実習」も同じく少人数で行われます。中でも、文献や資料を講読したり、自分で選んだテーマについて研究報告を行い、受講者で議論を戦わせた「演習」は、専門分野の研究手法や考え方を習得し、自ら課題を発見し解決する能力を鍛えるうえで大変重要です。
- ④ **卒業論文**  
卒業論文は、文学部4年間の学習と研究の結晶です。自分で研究テーマを決め、指導を受けながら、論文作成のための調査や分析も自力で行ないます。これまでに挙げた授業科目から必要な単位数を取得した上で、原則として20,000字(400字詰め原稿用紙で50枚)程度の卒業論文を作成し、口述試験(口頭試問)に合格すれば、卒業となります。

LEIT 2020 発行 神戸大学文学部 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 電話 078-803-5595 http://www.lit.kobe-u.ac.jp/

文学部への好奇心をアップする情報紙



FACULTY OF LETTERS,  
KOBE UNIVERSITY  
神戸大学文学部

2020

文学部の国際交流  
ことばとカタチ  
: 時間や場所を越えて何かを伝えること

Word and Image  
: Communication beyond time and place

知の現れ、見方、考え方  
佐藤 昇 (西洋史学専修)

文学部生になったら  
- 在学生・卒業生に聞く -

入学から卒業まで  
神戸大学文学部での4年間





# ことばとかたち: 時間や場所を越えて何かを伝えること

## Word and Image: Communication beyond time and place

文学部における学びの本質をごく簡単にまとめれば、それは「ことばを使って人に何かを伝える方法」ということではないでしょうか。そんなことは当たり前で、我々は日常生活においてもことばを使って不断に何かを伝えているのではないかと、何を今更学ぶ必要がある、とお叱りを受けるかもしれませんが、ただし、ここで大切なのは、自らが「ことば」を用いて人に何かを伝えることを学ぶだけでなく、文学部の学びにおいては、「ことば」を用いて何かを伝えようとしてきた長い人間の営為を自らを受け取る方法をも学ぶ必要がある、ということです。そのためには、時間をかけて作品や史料といった「ことば」を読み解き、理解することが必要となります。そして、先人たちの「ことば」の営みを知ることによって、自分自身が人に伝える「ことば」を磨き、より正確な、より美しい「ことば」の連なりを生み出すことが可能となるのではないのでしょうか。それは、日常の会話であったり、演習における口頭発表であったり、レポートや論文といった文章であったりするのでしょうか。

少なくとも私は、講義で伝える「ことば」、論文で伝える「ことば」が、常により良いものになるよう、より自らの意図が正確に伝わるものになるよう、長い歴史を経てこれまでに残された様々な「ことば」(それは古代の詩や歌、物語、中世の説話や日記、近代の小説や随筆、現代の小説や評論など、多岐に渡ります)に常に触れ、なんとかその深みに達しようと日々試みています。

私は美術史家であり、研究対象は、中国、及び日本の

古代から中世の絵画です。つまり「ことば」ではありません。それは「かたち」です。これを学問の対象とするためには、「かたち」を「ことば」に変えるという行為が必要になります。美術史家の一生とは、「かたち」が持つ多くの情報を如何に漏らさずに「ことば」にするか、その方法を生涯をかけて模索することに他なりません。そして、その際、過去にその「かたち」を眼にした人々が、どのような「ことば」を発し、遺してきたのかを知ることはとても重要です。そこに史料を探し、先行研究を読むという学びが必要となります。さらに美術史の枠を超えて、日々接している時代や地域を異にする「ことば」がお手本になることは言うまでもありません。そして、時には、それを歴史や文化を異にする空間で生まれ、育まれた人々にさらに伝えることも大切なことです。

5月25日。今年最初の暑さが続く晴天の土曜日。毎年恒例の留学生を中心としたバスツアーで、40名を超える学生とともに、奈良・法隆寺、天理大学図書館、明日香村を巡りました。私の担当は、法隆寺について、現地で彼らに説明することでした。法隆寺とはどのような歴史を持つ寺なのか、そして、そこに存在する建築、仏像、絵画、工芸品など、様々な「かたち」にはどのような意味があるのか。西院伽藍、大宝蔵、東院伽藍(夢殿)と廻りました。そこで感じたのは、やはり「ことば」で「かたち」やその意味を伝える難しさです。しかし、一方で「ことば」がなくとも、我々の目の前にある「かたち」は、それにしっかりと対峙さえすれば、様々なことを伝えてきま

す。それを見る者の心のわずかな高鳴りとして。そして、それはそれぞれが歴史や文化を異にする場所で育った留学生たちにも様々な心の音色を残したようです。

私の恩師は、大変に厳しい人でしたが、作品について語る時は、常に真剣で、そして楽しそうでした。「ことば」の端々から、真剣さと楽しさを感じ、美術史という学問をすることはこんなに楽しいことなのだ私たちに思わせてくれました。このことが、その細かな研究の内容よりも、私が美術史という学問を続ける原動力になったように思います。

文学部の学びとは「ことば」を学ぶことであると冒頭に書きました。しかし、「ことば」をしっかりと学ぶことは、その「ことば」の外にある「ことばにならない」ものを感じ取る力をも養います。そして、その外にあるものを、いつの日か「ことば」にできること、「ことば」の外にある何かも含めて「ことば」として人に伝えることができるようになること。ひとりの人間が一生をかけるにふさわしい大切な課題であるように思われますが、いかがでしょうか。

副学生委員  
増記 隆介



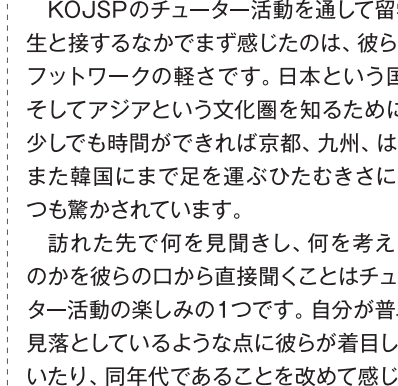
## LET MESSAGE BOX



私は去年の秋に神戸大学文学部に入って、神戸オックスフォード日本学プログラム(KOJSP)を始めました。このプログラムを通して、日本語の授業に出るだけでなく、日本の学生と一緒に文学部の講義にも参加しています。また、4月から受講している「KOJSP演習」では、「相撲は近代スポーツか」という、自分が選んだ論文テーマに取り組んで自らの研究を進めています。

実際に大学で勉強する上で、一番貴重だったのは日本で生活できたことかもしれません。やはり、勉強している国に住んではじめて分かることが多いからです。例えば、日本に来る前は、相撲は体格の大きい人しか参加しないスポーツだと思っていたのですが、実は60キロである私でも去年の10月から神大相撲部で活躍しています。私の相撲体験を通して、相撲はテレビで観るプロ相撲だけではなく初め理解できました。イギリスに帰ってからも、「現地に住めば分かる」という経験を大切にしたいと思っています。

Adam Powell-davies  
(KOJSP留学生、イギリス)



KOJSPのチューター活動を通して留学生と接するなかでまず感じたのは、彼らのフットワークの軽さです。日本という国、そしてアジアという文化圏を知るために、少しでも時間ができれば京都、九州、はたまた韓国にまで足を運ぶひたむきさいつも驚かされています。

訪れた先で何を見聞し、何を考えたのかを彼らの口から直接聞くことはチューター活動の楽しみの1つです。自分が普段見落としているような点に彼らが着目していたり、同年代であることを改めて感じさせるような感想を抱いていたりと、彼らとの会話のなかには相違点、共通点を含んだ様々な気づきがあります。

森本 柊太  
(KOJSPチューター学生)

3年前、私は日本の学部生として大阪の大学に留学しました。今回は神戸大学大学院人文学研究科の交換留学生として、2度目の留学だったので、新たな経験を必ずしたいという気持ちを持ってドイツを立ちました。その願いが叶ったのは、神戸大学のボランティア団体のおかげです。神戸では、阪神・淡路大震災の発生とともに生まれたと言われるボランティア文化が大事にされており、若い世代もその文化を受け継いでいます。そのおかげで、留学生であっても、ボランティアセンターの団体と一緒に災害で被害を受けた熊本や東北に行き、地元の方々に触れ合うことができました。



人との関わりが中心の活動なので不安がなかったとは言えませんが、それを乗り越えて挑戦してよかったです。活動を通して、人々がどう災害と向き合い生きているのか、生活や考え方にどんな影響が出ているのか、より分かるようになったと思います。それは同時に、自分を見つめなおすきっかけとなりました。

Sabine Grzanna  
(交換留学生、ドイツ)

私は去年の10月に神戸大学で勉強し始めました。3月まで神戸大学大学院人文学研究科で日本史を勉強をする予定でしたが、延長を頼みました。なぜなら、神戸大学での経験が素晴らしかったからです。神戸大学文学部のおかげで、日本史と文化の授業を受講できます。もちろん、私は日本語の勉強を頑張っています。

しかし、日本に来たことでの理由は勉強することだけではありません。私の一番大切な目標は日本人と友達になるということです。日本人と一緒に生活することで、日本人の文化と習慣がよくわかること、日本人の文化と習慣がよくわかること、考えたからです。

また、私は水泳部に入部しました。そこで、素晴らしい人に会い、友達になりました。毎日一緒に活動しています。しかし、私は文学部の授業やインターナショナルアワーで他の人と新しい留学生にも出会いました。一番面白いと思うことは、いつも会話のとき、自分たちの習慣を教え合うことです。神戸大学大学院人文学研究科の交換留学生としての生活は私にとって素晴らしい経験です。



Pavan Mattia  
(交換留学生、イタリア)

## 知の現れ、見方、考え方

法学部では法学、経済学部では経済学を学ぶ。自然と思いつくことでしょうか。では、文学部とは何を学ぶところなのでしょうか。いざさか難問かもしれませんね。実際、文学という言葉が想起させる小説や戯曲、詩などについて学ぶばかりではありません。哲学、歴史学、美術史学、言語学、社会学、心理学など多様な学問を対象としており、扱う時代や地域なども様々です。強いてまとめれば、私たち人間の知性がどのように発現するのか、「知の現れ」について学んでいると言っているのかもしれない。人間が知性を働かせて作り出した／している思想や芸術、言葉、組織、集団、制度にはどのような特徴があり、時代、地域、個人や集団によっていかなる特性、共通性があるのか。あるいはそもそも人間が働かせる知性にはどういった性質、限界、可能性があるのか。さああたり、こんなことが文学部の学びなのかなと考えています。

神戸大学文学部では各学生が2年次以降、こうした学問分野から専門分野の一つを選び、学んでゆくことになります。さて専門で学ぶというのはどういうことなのでしょうか。もちろん人や事象の名前を覚え、新たな知識・データを蓄えるという側面もありますが、しかしそれと同時に、あるいはそれ以上に「見方、考え方」を鍛え、養うのは、主たる専門での学びなのではないかと私は考えています。人間の知性が作り出すものは、芸術であれ、組織や制度であれ、想像をはるかに超えるほど複雑で、不確実な要素を孕み、時の経過とともに揺らいだりもします。全体をまるごと理解することは困難です。どこかに視点を定め、見える限りのものをできるだけ正確に観察してゆかざるをえないのです。ではどこから眺めればより見通しが利くのか。どこに注目すると細部に目が届くのか。視点の置き場所次第で見える世界も異なってきます。さらに視界のどこに焦点を合わせ、どのように整理すると、理路が整い、他人にも分かりやすい説明ができるのか。逆に、視点を一つに定めると、視界から消失するものは何なのか。明快に整理することで、零れ落ちるものは何なのか。そうした点も含め、批判的に物事の「見方、考え方」を学ぶこと、講義や演習、卒業論文の制作などを通してそうした力を養ってゆくことが、専門での学びの一

つなのだろうと思います。自ら主体的に思考し、複雑な社会、混迷を極める世界に對峙してゆくための力を養う場といっても良いのかもしれません。

ところが物事をより深く探求しようとする、学問は専門性を増し、断片化してゆく傾向も孕んでいます。専門を追求するあまり、複雑で、変容を続ける人間の知性を、社会を、この世界を正しく理解できなくなるおそれもあるのです(研究者を目指す多くの学生たちにも、この点はとても大事なことだと思います)。幸いなことに、コンパクトながら多様な専門分野で構成される神戸大学文学部は、分野間の交流も盛んで、複数の「見方、考え方」に触れること、さらに専門分野の「見方、考え方」を批判的に見つめ直すことも決して難しいことではありません。私自身、他分野の先生から刺激を受けることが少なくありません。目下、古代ギリシアの民主政と修辭文化について研究していますが、心理学の先生に意見を伺ったり、文学の先生から刺激を受けたりしたこともあります。先に日本史、東洋史、西洋史の教員が、専門の枠を超えて各々の「見方、考え方」を示した『歴史の見方、考え方: 大学で学ぶ「考える歴史」』(山川出版社、2018年)を出版しましたが、これもそうした営みの結晶と言えるでしょう。学生たちも専門以外の授業に出席して多様な「見方、考え方」に触れ、多元的な「見方、考え方」を身につけようとしています。留学生との交流も盛んで、これもまた「見方、考え方」を見直す良い機会になっているようです。既存の視点に囚われ、固着した思考をくり返すばかりでは新しい価値を生み出すことなどできないでしょう。専門の学びを通じて培われる力が、不自由さの檻の中に閉じ込められることのないよう、いくつもの手が差し伸べられているのかもしれない。

## 佐藤 昇 准教授 (西洋史学専修)

